

書 評 と 紹 介

宮本太郎著

『福祉国家という戦略』

スウェーデンモデルの政治経済学』

評者：飯野 靖四

私は本書の書評を依頼された時に引き受けるべきか断るべきかの返答にかなり迷った。というのはまず第一に、本書は既にさまざまな評者によって書評がなされており（例えば益村真知子東北学院大学助教授によるもの、『海外社会保障研究』No.134, 2001年春号）、屋上屋を架すことにならないかと危惧したからである。もう一つは本書をパラパラとめくってみた時に、内容があまりにも私の専門である財政学と異なっており、公平な立場で評価することができるかどうか危惧したからである。しかし私自身も1975年にスウェーデンに留学して以来、四半世紀も何らかの形でスウェーデンとかかわっており、しかも私自身もそれなりにスウェーデン論を書いてきたので、違った立場と角度からコメントするのも悪くはないと勝手に自己判断をして、引き受けることにした。

引き受けて本書を精読し始めてものすごく後悔した。というのは、本書はそう気楽に読める本ではなかったからである。巻末に参考文献が載せてあり、日本語文献を見た限りでは著者の若さを反映して古い文献がかなり抜けているなという気がしたが、外国語文献を見ると書名が実に16ページにわたって記されており、最初は

いろいろな本をよく調べたなという感じであった。しかし本書を読み通していくうちに、それらの参考文献はサラッと目を通しただけの書名ではなくて、すべて丹念にノートをとりながら、しかも著者の奥深い見識に照らし合わせながら読んだ本であるということの思い知らされたからである。したがってそれぞれの文中にちゃんとそれらの本からの引用箇所が記されている。文献はもちろん英語文献がもっとも多いが、スウェーデン語文献もかなり含まれており、著者の読書量の多さに驚かされた。私自身もスウェーデンに延べ3年以上も留学しているのでスウェーデン語文献をそれなりに読んでいるが、著者の読書量は桁違いに多く完全に圧倒されてしまった。

1

本書の構成（目次）は下記のようになっている。

序章 課題と視角

- 1 福祉国家を問題にする意味
- 2 比較福祉国家の理論
- 3 福祉国家戦略の構造
- 4 本書の構成と時期区分

第2章 スウェーデンモデルの形成

- 1 スウェーデンモデルとは何か
- 2 労働戦略の転換
- 3 新しい経済政策の形成
- 4 普遍主義的福祉政策の形成
- 5 経済危機と人口問題をめぐる比較
- 6 小括

第3章 スウェーデンモデルの成熟

- 1 戦後体制の離陸
- 2 選択的経済政策の展開
- 3 普遍主義的福祉政策の展開

- 4 スウェーデンモデルの構造
- 5 年金政策を中心とした比較
- 6 小括
- 第4章 スウェーデンモデルの揺らぎ
 - 1 70年代のラディカリズム
 - 2 「第三の道」と経済グローバル化
 - 3 コーポラティズムの終焉
 - 4 新しい社会民主主義戦略
(分権化・個人化・欧州化)
- 第5章 スウェーデンモデルを超えて
 - 1 福祉国家はどうなる
 - 2 スウェーデン福祉国家の現在
 - 3 新しい福祉システム
- 終章 日本への示唆
 - 1 日本モデルとスウェーデンモデル
 - 2 日本モデルの転換点

2

以上の目次を見ても分かるように、本書はスウェーデンモデルなるものの歴史的な発展過程・戦略を細かく分析し、それを通じてわが国への教訓を学び取ろうとするものである。

もちろん本書以前にも、スウェーデンの社会保障制度から学びとろうとした本は無数にある。そのうちの圧倒的多数は、スウェーデンの社会保障制度のすばらしさを絶賛し、わが国の歴史・経済・社会・文化・民族性等の差異を全く考えずに、それらをすべてわが国に導入すべきであるとするものであった。そして残りのごく一部の本は、それらのすばらしい社会保障ゆえに、スウェーデン国民がいかに税の重みに苦しみ、あるいは社会保障を享受する方にまわって働く意欲を失っているかということ伝えて、スウェーデンの二の舞にならないように学ぶべきだとする否定的なものであった。それらの記述はそれぞれに見てみると、そんなに間違っているわけではないが、スウェーデン社会のある一面をとりだして、自分の主張に都合の良

い面のみを強調して伝えているにすぎない。

本書はそれらの本と同じような目的をもって書かれているにもかかわらず、それらの本とは全く異なった手法で、つまりそのような社会保障制度が整備されていく歴史的過程を政治面、労働運動面から丹念にフォローすることを通じて、スウェーデンから学ぼうとするものである。その結果、著者がスウェーデンの歴史から得た教訓は「スウェーデン福祉国家の形成と展開は、よくいえばドラマティック、悪く言えば狡知な計略に満ちた駆け引きの連続であった。本書が注目をしたいのは、スウェーデン福祉国家、あるいはスウェーデンモデルをうみだしてきた、このリアルな政治と戦略に他ならない」ということであり、したがって「スウェーデンモデルから学ぶべきは、個々の政策や制度よりも、そのシステムをうみだした戦略のあり方そのものなのではないか」と結論づけている（序章）。このような少々冷めたスウェーデン観は今までの「スウェーデンに学ぼう論」にもっとも欠けていたものであり、そういった意味で本書は新しいスウェーデン論を切り開くものとして十分その存在価値を有するものである。

ところでスウェーデンモデルという言葉はしばしば使われるし、本書でもその形成・発展・揺らぎ過程が重点的にとりあげられているが、それは一体どのようなモデルなのであろうか。その点について本書は第2章1節（スウェーデンモデルとは何か）において詳細に検討している。その節で著者は、それを「資本主義体制のもとで労資がその共通の利益を最大限に追求するモデル」、「経済政策や労働市場政策がインフレを回避しつつ完全雇用を貫く」モデル、「歴史的妥協の帰結としてうみだされた重厚な公共セクター」モデル、「福祉国家への政治的コンセンサスをつくりだしたコーポラティズム的な政治制度」モデルとする諸説を紹介した上

で、それらはスウェーデンモデルの一要素を強調したものに過ぎず、「こうした一連の要素を結び付け、相互に連携させ、優れたパフォーマンスを実現してきたスウェーデン」の歴史そのものがスウェーデンモデルの特質であると結論づけている。

このようなスウェーデンモデルを実現するためにスウェーデンは「ずいぶん危ない橋を渡り、少なからぬ代償を支払ってきた」が、「しかしあらゆる手段を尽くしてその理念を現実に移そうとする強固な意志が存在したこと、さらにそれを可能にする政治的技量があった」がゆえに、現在のスウェーデンのシステムを実現させることができたとしている。それに対して「わが国政治は、堅実な理想を掲げつつもその実現への戦略を欠くか、逆にいっさいの理念を放棄して政治のための政治に走るか、二者択一となりがちである」(以上、はしがき)とし、わが国における政治・戦略の貧困・欠如を嘆いている。わが国の政治に関する見解は、私も全く同感である。しかしもしそうだとすると、果たしてわが国にスウェーデンのそれらを学ぶ、あるいは学んで役立てうる政治的基盤があるであろうか。私は日本の歴史・政治的風土・国民性等から見てそのような基盤がなさそうであると考えている(例えばスウェーデンの1998年総選挙での投票率は大幅に下がったが、それでも81.4%を維持しているほど民主主義が行き渡っている)ので、スウェーデンモデルは一つの理想モデルではあるが、余りわが国の参考にならないのではないかと考えている。

したがって私は本書を、わが国が学ぶべき模範国としてではなく、単にスウェーデンという国の今までの社会保障を充実させてきた苦労話として読ませていただいた。そういう意味では、本書を読むだけでスウェーデンという国が如何にしているいろいろな「抵抗勢力」の邪魔を排しな

がら、あるいは妥協しながらしたたかに社会保障を充実させてきたかということがよく分かる(本書では範囲外のことなので省かれているが、スウェーデンという国が第二次世界大戦において戦争に巻き込まれないようにどのような涙ぐましい、そしてしたたかな努力を行ってきたかということを知ると、それが更に理解できるように思う)。そして近年になると、スウェーデンが経済的不振の中でいかにして社会保障制度を効率化することを通じて後退の危機から守ってきたかということが分かる。わが国では社会保障の効率化ということは社会保障の充実ということと相反する政策として捉えられているが、スウェーデンでは社会保障の効率化が社会保障の維持および更なる充実のためにはかられてきたのである。この点は財政面からアプローチする私からみるとわが国でもっと強調されて良い点だと思う。

3

私自身はスウェーデンの歴史をちゃんと勉強したことが無いので、本書は本当に良い勉強になった。スウェーデンに留学していながらその意味を理解できなかった歴史的理りもかなり理解できるようになった。ただ1970年代以降の時期に関しては、私自身もスウェーデンで生活していたし、また帰国してからもスウェーデンの動向はそれなりにフォローしていたので少しは実感がある。1970年代は、本書の分類で言えばスウェーデンモデルが揺るぎ始めた時期である。そう言われると、確かに1970年代はスウェーデンモデルが揺るぎ始めた時期であったような気がする。ただその理由を本書では「脱工業化あるいはポスト・フォードイズム化としてとらえられる産業社会の構造の変化」と「経済のグローバル化に伴う労資の力関係の変化」にのみ帰しているが本当にそれだけだったのだろうか。私自身の感じでは、1970年代まではスウ

エーデンは第二次世界大戦に巻き込まれなかったメリットを最大限に享受して経済も好調であったが、新しい技術開発と構造改革を怠ったせいで、ヨーロッパ諸国が本格的に復興をはたしてくると国際競争力が急速に弱くなっていった。もともとスウェーデンはGDPの40%近くを国際貿易に依存している（それと比べるとわが国の国際貿易依存度は10%程度）国際競争力が弱くなると国内景気に直ちに響く体質をもっている。したがって国内景気が悪くなると平価切下げを行って国際競争力を高める政策をとり続けたことは理解できる（因みに私がスウェーデンに留学した1975年の1クローナの価値は75円前後であったが、現在は12円弱である）が、その効果が続いているうちに何か技術開発、構造改革をやらねばならなかったのにそれを怠ってきた結果が1980年代の経済危機であった。経済危機が起これば当然のことながら、社会保障の節約（効率化と切り下げ）が行われた。そうといった動きについても、本書は余りにも労働運動と政治の動きによって説明しようとしすぎているくらいがあるように思われる。

最後に私の専攻からくるものかも知れないが、気になることを一つあげておきたい。本書

の図表には（スウェーデン統計年鑑からのものを除いて）ほとんど引用した文献の図表がそのまま使われている。私自身はこのようすばらしい本は書けそうにないが、統計資料だけは常にスウェーデンの原資料から作成するように心がけている。他の著者の資料が間違っていることもあるので、チェックするためでもある。資料を時系列で集めることはそれなりに大変であるが、スウェーデンの場合にはそれほど難しくないで、ぜひ自分で統計資料にあたって自分でも作成してみられることをお勧めしたい。

以上のような小さな不満はあるものの、本書はスウェーデンを本当に冷静な目で見つめた真の学術書である。スウェーデンにちょっと旅行して感動して書いた旅行記ではないので少し読むのに骨が折れるが、実際にスウェーデンに行き裏切られたという感を持たなくてすむという意味ではスウェーデンに関心のある人にぜひ読んでいただきたい本である。

（宮本太郎著『福祉国家という戦略 スウェーデンモデルの政治経済学』法律文化社、1999年12月、x+281+22頁、3,800円+税）

（いいの・やすし 慶応義塾大学経済学部教授）

I L O の 出 版 物  好 評 発 売 中



Breaking through the glass ceiling:
Women in management
「ガラスの天井の突破：管理職の女性」

高等教育を受け、世界の労働力の40%を占める今日の女性。しかし、女性が管理職に占める割合は、受け入れがたい程に低い。女性が労働市場に占める地位の変化を検証し、キャリアデベロップメント上の障害、機会改善のための行動について提言する。

L. Wirth 著 2001年刊 186pp. 2,500円



Towards the goal of full employment
「完全雇用をめざして」

今日の世界的な雇用状況を地域別に概観し、現行の政策が雇用に与える影響をアジア、南米、旧OECD諸国、中央・東ヨーロッパ諸国に分けて分析する。社会的に受け入れることのできる経済成長とは何か、完全雇用政策は正しい方向に進んでいるのか——ILOの視点から検証する。

P. Richards 著 2001年刊 143pp. 2,500円

ご注文は下記へ

ILO 東京支局

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70 国際連合大学本部ビル8階
TEL.03-5467-2701 FAX.03-5467-2700
郵便振替 00140-2-19221番/三井住友銀行神宮前支店 普通口座3149206